

中村俊定文庫
文庫 18
780



序

其名同而其實異者誹諧是也
彼之呼誹諧者侏儒之語而我之
呼誹諧者君子之言也
在上自三公下至庶人
莫不好焉
言似涉實
言深味焉
曾祖父亦常好



之於緝子或若真山水或述情人
頗有自得之新意矣門業數千人
皆會其意法簡寡欲大与俗殊矣
豈不懿哉曾祖已卒我伯父
其香能繼其業因纂此書以寓
追慕之志蓋不擇親疎遠近皆
在焉亦如歌仙一杆遂上之梓請
予為序予雖不文亦不可辭於是
序序戊寅仲夏

曾孫忠敬謹撰

壽をさるるのら 終ひ世に
 仇老仙に賞せりかつかの
 女のふさこー 石のわがけも
 りあやせよ 君と奈作
 とくく 鯉人をけけ多し
 龍上もつえんまー事 俳
 るのあまれけ上やあむ
 さかかー 須知
 まー 今もりー
 う なが おちん かの
 師の せまの
 りよやまの 家月半旬
 決まらるる 今
 せんお目 てる
 くも 一かふの
 全堂 念誦 ぶか
 せー

師の恩に謝すふはな之の殺 其川

老師一周の

御更りをおんる

こ 業やの御名子昔 芝谿

老師にぶらゝの果

向く 根の筆や枯る苗 哥^女 舌

この友師ふかれか
将母ふされはたこ

又月面や愁かきく 龍仙子 栢 丹泉

師も月面の影業いそが
も月並れ會ふとたは
かきくもきく恩師か
き浄たま国かひひき
のせの日の月のほろ
びく今の上

生の
かきく
かきく

まけ蓮のうのほろ 栢 拾翠

尊師追善

かきく
此外

師の思のたす
かきく
かきく

あし 東鶏

長月尋常あり
一田の御息がうすけ

師の墓れ日な後ふかうこ舟 八川

旭起師の一周り
御息が懐く

あきもまをいれとれそつ子銀 仙歩

桂徳院の八君く我をも御一
用ふあ〜〜せうく〜〜
か〜〜御恩のら〜
さ〜〜ら〜〜

とよめあつ
つた〜〜

御魂をい〜〜あつ不如 瑠眠

長月の月一〜〜の〜
〜〜其香の君あ
〜〜あつ〜
名〜
〜
〜
〜

ていおのりいんてい
しんていしんてい

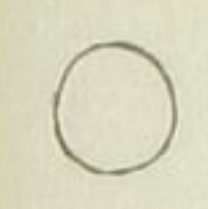
思ひ出さるるや泪と蟬と
焉哉

老師の
市一周目

去年もろりあつた
抽は月面
其蓬

追悼

月もろりあつた
郭公
秋菊



長月老師の一周の
清忌のあつた

八月雨のあつた
秋郊

橘はわらわら
丹霞

長月老師のあつた
白地
師教訓のあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた

あきかきし 此骨かきし 扇さる

寸鯉

長月法師の一周り行ふ

一句をゆけしめし

師の御息りゆく 此念の扇は

煉調

きりり音集しき ちりり

法々一乃果かきし ちりり

桂徳尊君より一わきの御法

あきかきし ちりり

御魂机かきし

ちりり

心はとも 御新紙かきし

五明

袖こきし ちりり

照車

其香尊君よりちりり

ちりり

ちりり

ちりり 御巻の

馬文

追悼

夏の河也すも昔言蜀魂

焮^廿竹竿

まの境に帰る福を授る
のちいふはも主の月の
多らた他かそるめくく
この海に川ををつくる
珠教を敷くか思ひ

か——法

又お月お袖落すはあはれ

松濤

七月三日法一圓忌

銀を布く法會や後水の夏のお

春樹

小日向のりくはを

隣

かけぬり徳あり

君をよむいふの師を多の
こきり——かわる時本地
又おをく——お文を
ゆき——けんあはれ
——お——お
——おくも
——お

天の宮にありてはるる御傍柳
ちりてはるる筆も向や羽振る
かきくは浪もや浮葉を一わく李

其松
秋山
南岡

天明のころは河門下小俣一
くくくおきききききも越犢の
河にけしきききききききき
十奈年のころは一わく李の
河見の小宮をさめく目を用
舞はるる西方が舞一す

まが入きぬきもあふ思重徑

昔牛

五月中の七の
御一周の御忌

うききききききききききき

星歩

おききききききききききき

關目

今ききききききききききき

歸來

御筆意の額はきききききき

東水

法書に河懸侍るるきききき

稻波

かきいり 因心 妙きりの夕烟

五柴

浄法會子 妙きりの夕月

煉言

浄一固

浄息子 妙きりの夕月

志のしり 袖や二見の初舟

煉園

ふらふれ やいり 煮の袖の裏

観魚

向のねり 美に海にふり 難が

岱雲

わらわ 紫のきみ ねふり 赤に

一固

葉ののり 妙きりの夕月

白翠

○

まじり 浮く 浄法の 妙きりの夕蓮の上

煉英

浄子 向の 妙きりの夕月

煉聲

まじり 妙きりの夕月

煉壽

浄法 妙きりの夕月

煉遊

まじり 入る 妙きりの夕月

煉圃

月ハ浅クシテハ越ノ机系
 妹 蹊
 子ハ朝や月の泣き不袖のあ
 妹 樹
 夕アアや糸を紫雲不鼻月時
 義 城
 橋不月ハカクハ白心ノ形
 妹 笛
 穴悲一ノ筆の跡を去月ナ
 堤 馬
 ねもすゝ御座のくも鳴城ハ
 曙 雲
 せんも涙ハかゝる蓮ノ難
 斜 雁
 師の御恩を述ぶ骨ハ碎ても
 岱 雲

とらう下を○かゝる何ノ都
 妹 調
 御供を一を○かゝる何ノ都
 急 候
 御持佛の御座の跡を去月ナ
 妹 雉
 袖ハ何日やわづらふ田畑時
 竹 馬

○
 光君がくまをせぬハハおそれ
 ともやもしわづらふ
 御座の跡を去月ナ
 何ノ都
 何ノ都

あしぬるふもくしほの

清きしはらふもくしほの
そすゆれ一軸をかけゆくも
小御影を辨

在はわく心うね涼しや桂影 丑原

葉玉小大悲りけや御子の跡 亀息

かたしなまのゆやま月のこゝろ 石樓

きよ月入る跡やちかむる辰 雲浦

さかきせふねもや油の流川 西巴

清子極り花も白くやまれ菊 春池

蟬の聲一浦経おほき清法師 夜白

常きれ煙も細くも月も 蟠松

石鞆もつゆの流るゝあけ衣 孤山

さみだれやまきの思ひの玉の氷 沅水

心ゆくも空を紫雲の薫が 青眉

袖流る涙はかきりも月も 芦笛

あふくもき月も流るゝも月空 春林



御示教も美しうとや一此小月

其風

御名牌小浄ちれ雲やたわや

嗽川

雨晴くく白ふ蓮や浄扇石

風調

去年をふ御被布ねじや社名

茂陵

せりくくのかおけりも美し浄廟名

其雪

一とせの浄けを美れ花子うけ

金拵

ねくお目ふ浄廟やかこも夏木立

松逕

流水やうきうきくもあはれ

御祥長ふけりくく世玉うけ

市いけくくくみのかこも日感

まう旦いけりくくくく

久んくくあき浄廟ふけりくくおねけり

孤村

ぬくをけり浄扇も涼く月まら

仙童

御志願くく入るふ美如や夏の月

市井

御在世小休の都の社人

何くくくくくくくくくく

あつたふらふら
あつたふらふら
あつたふらふら
あつたふらふら

御影くさゆらふらふら

秋賀

在は世の月くらげ池に蓮

春雨

あやふらふらふら

市道

あつたふらふら

あつたふらふら

あつたふらふら

あつたふらふら

夜潮

あつたふらふら

あつたふらふら

あつたふらふら

あつたふらふら

あつたふらふら

あつたふらふら

あつたふらふら

あつたふらふら

あつたふらふら

入梅くねやあつく一日の清墓を

開雪

いけいせの清影や白くまきり来

素月

ハ軸を清筆もまきり来の死

兎角

さふー一筆かやわ白紙の露を

わつらゆきふゆふー流しこぼれ

まきりよのこをこぼれをまきり

けしきくあつたゆ流れふまきり

うせ流るるまきりの中の

まきりのまきりまきりまきり

丸光に蓮のうしろの行會とハ

春賀

夕まの思はれも向や福はな

五粒

ゆけいふ扇や白く清筆跡

其月

よの花はせりてら草おぬき

いあつてりてりてりてり

わきりあき思はれ清筆や花はつて

其雲

かへりるや清魂恒はおきり

門身

居る在り清くは蓮は清園比

其黛

時も入梅清願はねいりたり

其扇

獨々祭——御ちやのり月面

傘舎

石径のゆ影は舞むまふが

雪嶋

○

積年俳道街にら初ふまふ

ふ恩基むら祭起りまふ

ふのこら——流は転——

ふらふらふのりか酒帰れ

ふゆまふ——まふ

昔草や御墓のりこはらまふ

亀貝

つめら祭月面御ちや清る月

閑雲

長月まふ御ち恩と清まの

清る清る清る清る清る

まふまふまふまふまふ

あふまふ 君まのまふ

身まふまふまふまふの入威

ま思ひまふまふの太衆もまふ

まふの清るまふまふまふ

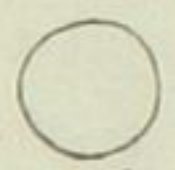
まふまふまふまふまふ

まふまふまふまふまふ

まふまふまふまふまふ

二行 又揚後きみの祥

麻中



師子の跡子ともおぼし持扇

松聲母

曾祖父お一周の忌日か

浪多の清徳や浴にかりき風

冠嶽

父おへう茶の忌むく

月おおへうおはけふえき佛

僂吹

亡父の小祥忌をむく悲位の

疾に抄むく人あやうく

こゝ茶のふふ鄙輝のか

おぼしき子の御名だを

おぼしき

南より一好ちし月日乃文此机 其香
 無かしつ月のみ付も一めら架 左
 阿し言はくその是巡長車不舎 左
 除れどし一此父をさる梅而是 左
 院よりさうまの思はしお府 左
 小しはるるふらふら如歸 左

ふらきて蓮ふまぬ月おれ古人 清殊

在せうくぬはるは行 其香

炊金の術も意木とる命自午 月潭

外をたれさうくく勢子いとき 青牛

國雨をさる塘は夕けく日 其川

隈をうきく更水一刷乞 麻中

廻ウ席へ船くうつはくしら 松聲

せなれあく念珠く僧 孤村

昔々己午原氏と申す風聲 燂賀

烟子烟子一雀いん時 春甫

忍ハせまゝいんおほハハ樹アツク 香

葉比の破きに立圃の噴 潭

面白やね吹物水は掃除 牛

高まらうく下まらうく草 川

け御き一昔哉月了古及古 中

朽目をあはれん治水橋板 聲

花水葉水と休院の音はし 村

繫まのうー一葉餅をお産 賀

欄二詩句お吟しそ、夏水山 甫

流をちーつゝ大学の君 香

おそとちー一彈茶うの指の股と痣 潭

挿く坂水来る窓の異件 牛

枝川に猿舟横たふ夕まこれ 川

下毒茶師水走る象鼻 中

雪梅の心くく白の煙れり
聲

はか手載りて埋む牙屑
村

軍切りてしかりも命を髪
賀

まは撰んて未枯の年
甫

枯心海ふりてのけふ月の蒼
香

菊咲跡に風をよみよみ
川

相思ふ中と白のむよみ灘
牛

心の京もなぬけく
聲

わきまはくまは袖の唄さし
村

孝の御感よ俵おし
賀

観念の念佛よたのらき
潭

御法の念よつほ墓
中

行川のかつれは維すしてあつ
まふらふらふらふらふらふら
消えかつ結ひて久〜こま
るふ〜と古人のこまを〜
晴の世の中にま〜人を元
常迅速のあ〜い〜れす能

老ゆめ翁かやさうり四つと
一期こして去年のさつふ中此
七といふふたのしみ極る
西方此騎旅をむむと小舟
渡馬の松もぬく永く彼地
こころ満ちたきひ地さみかき空

り一片の雪吹めくり来り
日ち一月り忌とふんげり
今此其香子との道福哉又
こころに門風を慕く人への
然眉の平此おやこもたむと
集兒様木へのかせ出懐り

掌と合せ玉魂をまじりて
こころに初まの神戸のまれ
まののしるしやうたかた
ひよりつ葉のまふ入れた
雙雀の志くふまれ葉は
ほもせめしむにませむを

あふ菊きききふあひまら
聲も片まれあまひまけさ
るまにまにまににあまそ
ゆき給りにこのまかのほ
ゆき詞のまにまにまに
取まにまにまにまにまに

更人と昔流すは〜らけ
うい拙筆を〜は〜
〜の筆を握り搦筆を
向ふ〜志〜を弱の生涯を
思ふ〜歳〜月を滑稽〜
吟ん〜志〜銘〜月を〜を

ゆいね野〜三言四〜詞夜
言禁〜と喰〜り〜予〜とら
と代の交り海〜と祖父を
やつ〜れ〜と〜遊〜とむ〜と七父ハ
茶〜の〜さ〜よ〜多〜の〜と〜そ〜ろ〜ゆ〜と伯父
香川の骨肉乃志〜と〜は〜

反古り端くさひよふ
風流をかみかき葉あひ
しむるを女侍けい果
しもわく思ふと世を星と
霞と花とあはれし
さし或るき月暮を訪ふ

口すゝみうらの斧とて
きれいとまめやうし
いしあゝいよー新波はの
夢もみ〜夜の咲くまら
懐舊の眼をひ〜き虚空を
生し法修と唱へて謹て退去

文政元寅の

えり苗の月

露滴齋

月潭



